論文の内容の要旨

論文題目　他者の原トポス
　－存在と他者をめぐるヘブライ・教父・中世の思索から－
氏　名　宮本久雄

本論文は「他者」の一真相を「自己」「わたし自身」の探求とからませて今日どのような言葉にひとまず定位できるかを参究した試論である．その際後述するように他者問題の広さと深さのため哲学のみならず，神学や文学の諸文脈やテキストを参照したのである．

そこでまず論文題目「他者の原トポス」を概説しつつ，他者および自己探求にまつわる諸文脈と問題とを明らかにしておきたい．

本論文のテーマ「他者」とは後述するように「わたし」の自同性を揺るがし破裂さす異であり，その意味でわたしより大いなる存在を示すが，他方で彼に責任をとるべく迫られ共に死ぬかも知れない無にも等しい存在ともいえる．

この他者問題を掘りさげる１つの方法論的切り口は「存在－神－論」(Onto-theo-logia)に求められた．というのも，それは哲学的思潮にあって，他者の抹殺「ショアー」をもたらしたロゴス中心主義や根源悪と深く連動していると考えられたからである．つまり「存在－神－論」は最普遍的な次元を設定し(存在やロゴスなど)，その次元を超越的にであれ内在的にであれ統一する視点や実在(神的至高存在者や文法など)から一切をヒエラルキアとし秩序づけ意味づけ，その限りで存在権を与え支配してゆくという特徴的構造をもつ．その結果，それは自同的に構成され，その自同的自己保存の力(conatus essendi)を自らに異となる他者に対して暴力として用い，非存在として抹殺するからである．

この「存在－神－論」の超克と他者の地平の開披に向けて本論文は，それを構成する三点(存在，神，ロゴス)に集中して再吟味を遂行し，その遂行上諸テキストと対面した．すなわち，存在はギリシア哲学以来の中心的な哲学の問いであり，神は殊にヘブライ・キリスト教の血脈を受け継ぐ問題であり，論(ロゴス)は理性・言葉さらにテキスト解釈に関わる問いであり，こうして本論は如上の三点を内蔵する場(トポス)としてのテキスト群を解釈しつつ，他者との出会いの痕跡をそこに参究したのである．本書はその「トポス」という言葉を，アリストテレス(『トピカ』『弁論』)をふまえつつも，およそ思索と生がそこに於いて生起・展開する場という広い意味で用いる．その意味では哲学史・文化史上のあらゆるテキストがトポスであるといえる．しかし，ここでわざわざ原(アルケー)を付したことは一体何故だったのか．

第一に他者の問題を内蔵するテキストの中でロゴス中心主義的理性主体とそれが構築した有神論的形而上学「以前」のテキストを「原」トポスと考えたからである．そうした原トポスは，理性主体による学知的還元に捕囚の浮目にあっていない古代・中世的テキストを意味しよう．第二にテキスト自体が他者への問いへの「根

源」として他者として読者に迫り，様々な仕方で「存在－神－論」を超える方位を孕む意味で「原」と考えたからである．以上の意味で「原トポス」は単に哲学史教科書が教えるクロノス的な意味での古代・中世哲学でもなく，また弁証法的展開を経て充実する，ヘーゲルの絶対的理念の立場から存在の歴史を俯瞰する論理(ロゴス)学を意味するのでもない．またハイデガーのように存在論的差異から出発して「存在の歴史」を思索し，まだ語られていない存在を現代的存在者から思考する立場でも，さらに一や善美というプラトン的思索と根本語を場とするものでもない．このようにわれわれは理性と理性が構築した存在(神)の死を自覚した原トポスのテキストを参究しつつ，「存在の彼方」に他者の地平を披こうとする．それが「他者の原トポス」という表題の意味であり目論見に外ならない．

如上の解説を基に次に本論文の具体的内容に言及し，さらに他者と自己に関わる探求の問題性と文脈を示したい．

「序」では上述の問題意識と現代的「ショアー」を招く契機となった「存在－神－論」の特徴と歴史を概観した．その特徴については先に触れたので今はその歴史を示しておきたい．その歴史はアリストテレスの第一哲学(神学)に端を発するとした．そしてプラトン主義からトマスを経てスコトゥスにおいて「存在－神－論」が形式上実質上成立したと考えた．しかし，この「存在－神－論」に対しコギトによる認識論的「存在－神－論」を構築して転換したのはデカルトであった．すなわち，彼は古き至高的存在者(善のイデア，不動の動者，キリスト教の神)のかわりにコギトを神とし数学的最普遍的な世界(mathesis universalis)の秩序化・法則化・構築の糸口をつくった．これ以降西欧の有神論的形而上学でさえ実のところ人間理性の構築物としてニヒリズムであると考えられる．こうしてヘーゲルを経て完成された「存在－神－論」は，今日技術支配，神の死(それに伴う人間の死)，全体主義支配などの歴史的悲劇をうむ温床となったことが論ぜられた．

「序」の問いを承けて「本論」では原トポスのテキストの解釈が遂行された．その際テキスト群は第一部の「哲学」的テキスト群と第二部の「神学」的テキスト群に分別された．それはどういうことであろうか．

哲学的テキスト群は，ギリシア哲学から中世に及ぶ「理性の彼方」が自覚されていた頃のもので，これとは別に神学と殊更銘打たれたテキストはヘブライ・キリスト教の系譜に属する文学，歴史，神話，福音書，手紙などをいう．この分別の理由は様々であるが，その一つは，哲学的言語がそこで鍛えられて出来した文脈として文学，聖典などに注目し「他者」探求の視界を広げるためであった．例えばパルメニデスの哲学言語がホメロス叙事詩に，アウグスティヌスの告白言語が「詩篇」に拠っているのは周知のことである．次に他者である「神」の文法を解釈しつつ人間の出会いの文法を見極めようとしたのである．だからここでいう神学はキリスト教的教義神学ではなく，諸宗教の伝える人類史的伝承の示すテキスト群に通底する新しい人間論的視点である．またニーチェ的な「神の死」がアウシュヴィッツ以降「神の沈黙」という文脈において再・解釈される今日，他者論に「神」がはずせない状況にあるからだともいえる．

さて第１部では，現代的他者論も援用されながら，ニュッサのグレゴリオスの『雅歌講話』が解釈された．そこでは人間の一期一会的在り方がエペクタシス(背面的聴従)論およびエペクタシス的解釈として示された．次にアウグスティヌスの『告白』テキスト解釈を通して，ギリシア的ロゴスが質料的他者(歴史，身体，感情など)さえ引き受ける言(Verbum)に転位した次第が解明された．いずれの場合も，情報伝達言語と異なって他者との出会いと自己の成立を創る創造的言語の地平が拓けた．トマスの判断論も可能的世界を描く学知的判断を超え，他者の現実性を披き「存在－神－論」の彼方を指示し，エックハルトはそれを基に説教言語を通し他者との出会いの途に立った．彼において存在に対する無が実存的な自己無化とそれによる共同存在的生に生きうる根底となることが闡明された．第２部の神学的テキスト解釈はまずヘブライ的『創世記』に関する構造的分析に始まり，そこで他者の無からの誕生とその喪失としての根源悪とについて論ぜられた．次に「善きサマリア

人の譬え話」解釈を通じ，如上の根源悪を突破する出会いの「Ethica」の構築が始められ，殊に「Ethica」の超越的次元参究のため死に思いを潜め，ケノーシスや放下の Ethica が示された．最後に抹殺された他者の甦りの契機として記憶・証言に関わるヨハネテキストが分析され，結局他者との出会い全体の根底に働くプネウマ言語が指摘された．すなわち，プネウマは気・霊風として凝固した自同的実体のかわりに動的な他者に開く存在(ハーヤー)の深処を披き，気に溢れる革新的解釈の動力となり，過去の忘却を現代に甦らせ未来の希望を創る想起的気力なのである．「むすびとひらき」は以上の解釈の結実を新たな出会いの可能性に向けて放とうとする試みでもある．まず「存在－神－論」を解体して存在がハーヤーとして了解された．ハーヤーは伝統的形而上学の「本質」でも，スコトゥスの一義的 ens でも，ハイデガー的 Sein でも，レヴィナス的 essance でもなく，自己脱自がそのまま存在であるような存在そして無を他者とする存在として明らかにされた．それは神の構造を三一的に了解させる．つまり，神はヘブライ的ツィムツームや三位一体論に窺われるように「自己無化」(ケノーシス)を意味し，自己同一性を無化して他者を迎えることそのことであった．この存在や神の了解はロゴスをヘブライ的ダーバール(言即事)として再解釈させた．ロゴスは最早一切を自己の許に再現前化させる理性というより，質料性(異文化，女性性，汚れ，時間など)を引き受け共に受難し出会いの共存在に向け思索する言となる．そうした言の根拠となるのも気(プネウマ)に外ならなかった．

以上のようにして示された存在，神，言は根源悪を越えて他者と出会うわれわれ人間一人ひとりの根拠としての日常的生の深層系を垣間見せてくれた．要はわれわれの許に到来する隣人が，ハーヤー的深層から息吹くプネウマ的働きに乗せられて日常の今ここに到来する限り，彼を通してわれわれは深層の示しの声の響くのをききうるのであり，そこにわれわれがいわば啐啄同時的に生まれ在らしめられ，しかもその自同を突破して再び生まれそして在るという生を生きることが自覚された．その意味で存在(hypostasis)と生成こそ，人間の在ることに外ならず，最後にその在るの契機ともなる他者は，彼を通し(per)出会いの深層から出会いに向けてのケノーシス的言が響く(sonare)意味で，古くして新しいペルソナ(persona)という言葉に定位された．　それが本論の限界である．